

先生の過去話

総科出身の岩永先生、
坂田先生の思い出話から
総科の良き伝統が明らかに！
学生への熱いメッセージも
必見です。



町田宋鳳先生（社会文化プログラム）

に取材させていただきました！

その波瀾に満ちた「過去話」

の数々、更には、学生に向け

た熱いメッセージも満載！！

奥田先生、開発先生、平山先生から会話形式で普段聞けないような話を聞き出しちゃいました！
学生へのアドバイスは特に必見です！！

担当

19 18
生 生

寺 桑 中
澤 田 野

潤 雅 陽
哉 美 介



先生の過去話



1983年入学 1978年入学
坂田桐子先生 岩永 誠先生

お二人に共通の思い出

☆行動科学☆

坂田 私が三年生になって研究室に入った時に、岩永先生はドクターの学生でした。

岩永 その頃の僕は、先生の授業

について行って受講生に実験のお願いをしていましたね。

坂 二人に共通の思い出ということだと、どうしても今の行動科学プログラム関係の話になるんですけど、卒論の中間発表会であちこち行ったりとか……。

岩 僕たちが所属していた行動系では、中間発表会とか卒論が終わったあとの祝賀会でしょっちゅう泊り込みをしましたね。発表が終わったら、学生で研究室対抗のソフトボール大会などを企画して一緒に遊ぶんですよ。騒ぎすぎ

て行けなくなっちゃった施設もあります。

坂 それから、心理学基礎実験、今の行動科学基礎実験が超厳しいっていう噂がたちましたね。

岩 今は時間割がきちっとしているけど、昔はだらだらだったんですよ。土曜日にも授業があつて、朝八時四十分から授業開始で実験が終わるのが夜の七時、八時っていうのがたまにあつたんですよ。昔の先生って結構アバウトで「まだ終わらないか？ 頑張つてね」とだけ言われて、そのまますぐと続けるということが結構ありましたね。

坂 今でも厳しいって言われていますけど、私たちの世代から言うとそれほど厳しくないですよ。

岩 レポートの書き直しなんかほとんどさせませんからねー。昔はしょっちゅうありましたよ。

坂 あと、今は一回病気で休んだからといって評価が一段階下がるといふことはないんですけど、昔は「風邪はひかないで下さい」と言われていたんですよ。

岩 そうそう「気が緩んでいる証拠です」ってね。そういう

精神主義の塊みたいどころがあつて、ぼろぼろになりながらも、その一方でみんな遊ぶんですよ。男子も女子も一緒になつてしょっちゅうグラウンドで遊んでいました。それ

と、今はもうしていませんけど、昔は卒業生祝賀会でそれぞれの先生が料理をして学生に食べさせていたんですよ。先生と学生の結びつきもかなり密でした。

☆先輩・後輩☆

坂 私たちは研究室の所属は違つたんですけど、しょっちゅうお互いの研究室で一緒にお茶やお酒を飲んでいましたね。西条にキャンパスが移転してからは研究室でお酒を飲んじゃいけなくなつたんですけどね。

岩 卒論が終わる十二月頃に手の空いている上級生が研究室でおでんを作っていたんですよ。そのにおいがすると他の研究室からも学生がどんどん集まってくるんですよ。で、それを食べて、卒論をがんばると。

坂 そうそう。今はもう研究室で料理は出来ないんですけどね。

岩 皆で集まつてご飯を食べる

中で先輩・後輩の仲が深まりましたね。上級生は下級生にデータ処理などを教えて、下級生は実験などで上級生を手伝っていました。こういうことを研究室の粋を超えてやっていたんですよ。

坂 私も学部生の頃は院生に教えてもらえて嬉しかったし、すごく役に立ちましたね。

岩 院生に教えてもらわないと分からないこともあるし、先生って概念的なことは言うんですけど「具体的にどうするの」って言われたときにはなかなか時間が取れないんですよ。だから実験のやり方やデータ処理の仕方は院生が中心に教えてくれましたね。同級生との友達関係も大切ですけど先輩・後輩の関係を上手く作ると、自分の分からないことを教えてもらえます。先輩にとつても、例えば実験の参加者集めなどの細かなところを下級生がやってくれるなどのメリットがあります。みんなこの過程で仲良くなつていくんですよ。この関係は今

の年齢になつてもずっと続いていきます。皆さんもぜひ先輩と仲良くなつて下さい。

岩

岩

岩

岩

先生の過去話

総合科学部の昔と今
☆総合科学への熱意☆

坂 岩
私たちが入学した頃は、先生方がすごく総合科学というものに熱意を持っていました。ただ、今にして思えば、当事は具体的にどうやって総合科学を実現させていくかというところまではなかなか話が詰められていませんでした。

岩
学問領域の壁が大きかったんですよ。

坂 岩
でも熱意だけは凄くて、総合科学にプライドを持っていらっしゃる先生がたくさんいました。学生もこの学部にいることにすごくプライドを持っていました。「私たちは既存の学部じゃないんだ」という気持ちが強くて、他学部と比べても全然劣等感なんて持っていませんでした。でも今の学生の話聞いてみると「総科って中途半端だな」とか「広く浅くしか学べないんじゃないか」とか、そういうところをすごく気にしている人が多い気がしますね。

岩
今のほうがカリキュラムはるかに充実してるのね。

坂 岩
総合科学としての実が三十年かけてできつつあるところなのに、どうしてみんなもっ

と誇りを持たないんだろっていうところをすごく強く感じますね。

岩
総科に入ってくる学生の半分は、何をやっていいかわからないモラトリアムなんですよ。それはある意味自分にとっては何となく重要なことで、これから新しいことを発見していくことができるわけですよ。そのためには努力が必要で、色んな勉強をして

岩
「自分がやらないといけないことは何か」という課題をぶつけなければいけません。果たしてその働きかけをどれくらい自分がやっているのかというところが少し気になります。実は総科の学生の入学偏差値って高いんですよ。でも一年生のテストの答案を見てみると中途半端なことしか書いていなくて「どれだけ真面目に授業に出ているのだろう」と思うときがあります。

坂 岩
他の学部から「総科って何やるのかはつきりしてないじゃん」と言われておもしろしている部分があるかもしれないけど、他の学部では何をやるのかを先生が決めるんですよ。総科は自分が決めることができるんですよ。あんな授業もあるしこんな授業も

あるっていうのを自分で上手く探して行けば、ものすごくたくさん色んなことができてる。既存の学問にはないもの、新しいものをつくるんだっていう気概を持ってやると、新しいものはいくらでも生み出せる。そういうのが、総科の重要な点なので、そこをもう少し強く思って勉強して欲しいですね。

坂 岩
オリキャン
☆昔☆
私たちは行っていないんですけど、昔のオリキャンは学部ごとじゃなくて広大全体の一年生が二年生たちに連れてって千人位で宮島に行っていたんですよ。

岩
その当時は広大全体のオリキャンの他に総科だけの行事があつて、僕はそっちに行きましたよ。やり方としては今のオリキャンに近いのはその総科の合宿だと思んですけど、内容は今と全然違いますよ。遊びは一切なくて、ずっと先生と総合科学についてディスカッションをしていたんですよ。

岩
☆現在☆
様々な地域から集まってきた、まだ友達の少ない不安な

坂 岩
新入生を先輩が助けてあげるのはいいことですよ。中身をどうするかについては色々な意見がありますけど、皆さんは自分達が先輩としてアピールできる場を上手く利用して、やりたいことをやればいいんじゃないですか？ それと、私としては三、四年生の人も行くようになってほしいです。二年生は各プログラムで何が学べるかと聞かれてもまだ分からないですよ。そこで三年生や四年生がいればもっと話を広げることができると思います。

坂 岩
それと、今のオリキャンは二年生の人々がすごくたくさん参加するでしょ。そこは多分昔と違うところで、昔は一部の二年生だけが一年生のお世話役をしていたんですよ。自発的にやりたい二年生が多いということは一年生のときが楽しかったんだろうし、連れて行ってもらうのではなくて一年生を連れて行くという経験をするというのはすごく大切なことだと思います。

取材協力
19生 桑田 雅美
18生 中野 陽介
19生 寺澤 潤哉
平島 あゆみ

先生の過去話



町田宗鳳先生

プロフィール

一九五〇年京都市生まれ。一四歳で出家。二一歳のとき、寺を飛び出し、半年間の放浪を経験。三四歳のとき、無一文で渡米し、ハーバード大学神学部修士課程終了。ペンシルヴァニア大学中東・アジア学部で博士号取得。プリンストン大学東洋学部助教授、国立シンガポール大学日本研究学科学科准教授、東京外国語大学教授を経て、現在、広島大学総合科学部教授。専門は比較宗教学、比較文明論、生命倫理学。

先生は一四歳のときに出家されたそうですが、それ以前から「宗教」に対する興味はお持ちだったのですか？

うん。私のおばあさんが非常に信心深い人だった影響もあって、物心がついたときから関心は持っていたね。そして、小学校五、六年生のときからキリスト教の教会

に通い始めたんだ。

—では、どうして「キリスト教」ではなく、「禅」の世界を選ばれたのですか？

理由はいくつかあって、まず一つ目が、体が弱かったから体を鍛えたかったため。二つ目が、修行の仕方が実践的でカッコよかったから。三つ目は、親から独立したかったという理由からだね。

—どうして出家を思い立たれたのですか？

結局のところ、運命だったのだろね。いま振り返ってみると、目に見えない大きな力に導かれた、そんな風に思うね。もちろん当時は、自分で決断して行動したつもりでいたんだけど。

—一四歳で出家する以前は、どんな子ども時代を過ごされたのですか？

普通の家庭の次男坊だったわけだから、特別変わったことはないよ。非常に優しい親だったし、普通に学校に通っていたし。ただ、昔から一人遊びが好きだったね。今でも集団行動は嫌いだね。

—二一歳のときにお寺を飛び出されたとお聞きしたのですが……。

師匠と喧嘩したことがきっかけで、半年間アルバイトなんかをしながら放浪していたんだ。

—そのきっかけは何だったのですか？

京都の有名なお寺の権威主義的なあり方に矛盾を感じて、これは自分が求めたものではないと思ったから。ちょうど皆さんくらいの年代で、悩みも多くて本当に辛い時期だったね。

—なぜもう一度お寺に戻ってこられたのですか？

たとえお寺のあり方に問題があるにせよ、僧侶としてなすべきことはあるのではないか、自分自身の内面を高めていくことで考えてくるものがあるのではないかと考えるようになったから。何か宿題をやり残したような感じがしてね。

—お寺に戻ってこられてから、生活は変わりましたか？

全く変わったね。それまで通っていた大学も辞めて、朝の三時半

から夜中の一二時までぶっ通しで修行するようになったわけだから。とにかく修行に明け暮れる毎日だったよ。

—三四歳で渡米されたのはどうしてですか？

二〇年間も本を開けない生活を送っていたから、とにかく勉強したかった。それに、禅の世界だけにどっぷりと浸かっていたので、外から禅や仏教を眺めてみたいという気持ちがとても強くなったからだね。

—外から見ると、それらはどう見えましたか？

中身はグイヤモンドのように輝いているのだけど、伝統という形式主義に覆われてしまっている。非常にもつたいないと思う。

—それとは逆にいまの日本では、むしろ伝統がないがしろにされすぎていくように思うのですか？

……。
そうだね。いい伝統が廃れて、自分の思い込み、現代社会で作られた「常識」が自分自身を押し込んでいく。自分で勝手に窮屈な価値観を作って、それで自分自身の

先生の過去話

首を絞めてしまっているわけ。それを打開するためには、分厚い殻を打ち破らないといけない。

—そのためには何をすればいいとお考えですか？

自分の魂の声に耳を傾ける必要がある。その上で、自分で作り上げた価値観を持つことがとても大事になってくる。夢や目標に向かった自分らしい生き方をしなきゃ。

—先生は挫折を経験されましたか？

挫折の連続ですよ。挫折のない人生なんてあるの？ 夢や目標があるからこそ挫折するんだよ。

—先生は挫折を経験されたように見えないのはどうしてですか？

私の場合、挫折の経験を次に活かしているんだよ。挫折を経験することで人間への理解が深くなる。宗教を学ぶことは、まさに人間を理解すること。失敗や挫折はしたくないけど、してしまっただらば、それは何かのレッスンであるという受け止め方、それを肥やしにしてプラスの方へ変えていくという発想法が大切だよ。

—シンガポールに移られたのはなぜですか？

シンガポール大学に招かれたこともあるし、日本以外のアジアを知りたかったからだね。アジア圏で生活したら別のものが見えてくるかなと思っただんだ。

—日本に戻ってこられたのはなぜですか？

それも、東京外大に招かれたから。それに、五〇歳にもなり、今度は日本でなすべきことがあるんじゃないかと思うようになっていったんだ。日本はいま変わらんといいけない。そんな日本を変えていく力になりたかったんだ。

—日本はいま変わりつつありますか？

変わりつつあるけれども、まだ芽が出るところまではいっていないと思うね。

—先生はどのような切り口から手を付けようとお思いですか？

そりゃあ、教育でしょ？ 若い君たちをけしかけることが私の仕事だよ。君たちのしていない経験・知識を持っているのだから、君たちはそれを奪い取っていいかな

いと。そして、君たちを覆っている「殻」を打ち破っていくんだ。トイレ掃除（※1）もその一環だね。

—広大に来られたのはなぜですか？

それも、やっぱり広大に呼ばれたから。「文明共存論」という学問はまさに私のやりたいことだったんだ。それに、五年間も東京にいたから、地方ののんびりしたところに来たかった。そして何より、平和のメッセージはこの広島から出さないと。

—最近（※2）行かれた外国を教えてください。

チベット、フィンランド、スウェーデン、イタリアに行ったね。そして、来月、バン格拉デシュとベトナムに行くんだ。年間で少なくとも五カ国は行っているね。

—今の夢や目標を教えてください。

より幸せになることだね。自分が幸せにならないと人も幸せにできないものね。そのためにはまず、自分の悩みを素直に受け止めることが大事だね。全てが自分次第。そのことに気づいて欲しい。そうすれば、自然と素敵な仲間が集まってきて、より楽しく、生き生きと生活できるようになるんじゃないかな。

※1 『下座行』としてのトイレ掃除が、感謝の気持ちと謙虚な心を生み出す』という株式会社イエローハットの創業者鍵山秀三郎さんの掃除哲学に賛同された町田先生及び町田研究室の学生たちが、二〇〇七年一月八日に総科のトイレにて企画した取り組み。先生の「世界平和はトイレ掃除から」という呼びかけに、大学内外から八〇名余りが参加した。

※2 取材日は、二〇〇七年十一月六日

（担当 19生 寺澤 潤哉）
取材協力 18生 小野 未千恵
19生 稲村 円

自然環境科学プログラムの先生方に過去話をしてみました。広島大学理学部一九七九年卒業の奥田敏統先生、総合科学部一九八九年卒業の平山恭之先生、西条キャンパス移転以前から広島大学にいらっしやった開発一郎先生にお話をいただきました。奥田先生には途中から参加していただきました。

☆大学生生活☆

—先生方はどのような大学生生活を過ごされましたか？

開発 僕は二年まではほとんどクラブ活動をしていました。僕の大学では三年生の後半からは研究室に入れたので、先輩の調査の手伝いとかであちこち行きましたね。学習的な面から言うと大学ではあんまり勉強しなかったね。だけど、ものを実際にいっぱい見る事はよくしました。

平山 僕は於係先生の研究室だったけど、三年生の内はがんばって勉強しました。けど、それまではちよっとさぼり気味でした(笑)。



開発一郎先生 (写真 左)
平山恭之先生 (写真 右)

—何かクラブ活動をされていたのですか。

平 今は無くなったけど文化系の、影絵サークル、どろんこ、というのをやっていました。夏休みや春休みは地方の小中学校などを回って劇をしたりしていましたね。それで、ちよっと厳しかったので、三年の時から心を入れ替えました(笑)。

開 僕はテニスクラブをしていました。関西リーグのバリアの活動とクラブの遠征費を稼ぐためのバイトで、三年生の夏休みぐらいまでは、ほとんどそれで毎日が終わっていましたね。だけど、ちゃんと順位は取っていましたよ。そんなにいい成績ではなかったかもしれないけど(笑)。

—アルバイトは何をされていたのですか？

開 君らが、想像がつかないくらい色々な事をしましたね。女子高で教えたこともあるし、地下鉄の工事をしたことでもあります。その時は、夜の十時から十二時間労働したこともあります。

平 それは体育会以外の人には無理ですね(笑)。

—その仕事は、長期休暇でされたのですか？

開 いやいや、明日英語の試験があるって時にしました。それで、朝パ一っと元気になって戻って試験を受けていました(笑)。

その時の自分は、何にでも興味を持っていました。それが他のものを踏み倒していたのでしょね。

—テニスはいつ始められたのですか？

開 大学入ってからですね。それまでは、アルペンの競技スキーをしていました。

—影絵を始められたきっかけは何

—だったんですか？

平 映画や、本とかが好きだったからですね。文化系のサークルではあるけど、夏休みは十日間ぐらい合宿があつて、朝から夜まで練習して、帰ったら家で人形や背景を作ったり音楽を準備したりとか色々していたので、練習中は立っただま寝たりしていました。

開 大学のクラブって感じだね。クラブ活動を通して、情熱とか能力を養うことが大事だね。

—影絵がそれだけ忙しくて、アルバイトはされていたのですか？

平 やってましたよ。僕は、三年生の頃まで本屋さんで働いていました。(賃金は)安かったです。でも、本が二十五パーセント引きで買えるのが結構よかったですね。

☆オリキャン☆

—平山先生が学生として行かれたオリキャンはいかがでしたか？

平 一年生のときに、実際に行った時はすごく楽しかったですね。昔は全校(全学部)で行っていたので、とても楽

先生の過去話



開發一郎先生 (写真 左)
 平山恭之先生 (写真 中央)
 奥田敏統先生 (写真 右)

奥田先生登場！

開 しかつたですよ。
 当時は、宇品から船に分乗して行っていたんだけど、班で方針を決めて、『この班はインディアンを格好して行こう』とか、『この班はみんな女装して行こう』とか……当時学部長だった先生も女装されたんですよ。確かそんな格好のまま、ご自宅から来られていました(笑)。

平 みんな楽しくしていましたね。友達が一番増える時期だし、一年生にとっては大学の教員と実際の交流ができるチャンスでした。

☆学生へ一言☆

—— 学生にアドバイスがあればお願いします。

開 色々経験してください。あと、たくさん本を読んだほうがいいですよ。

平 そうですね。何でもいいから本を読んでください。それから、学外や社会との絡みを含めて三年までは色々やってみたいことをやってみたらいいんじゃないですかね。

奥田 それから、しっかり勉強してほしいですね。色んなものを許容できる時期っていうのは、年とともに変化していきます。若いうちに色んなことを研究してください。僕らのように生き物を対象とした世界で言うと、まずよく見て、触ってみて、かじってみて、嗅いでみるということが重要です。つまり五感を働かせて色んな角度からものを見、判断できるような感性を磨くことです。そういう習慣は、若ければ若いときほど身につくのでね。年とってからだと鈍くなりますよ(笑)。

開 社会勉強は大事にしないといけないよね。後々本人にとって財産になると思うので。

平 あと、そうだな。総科の先輩として一言。総科にはいろんな人が集まっている、それだけで多様性はあるのだけど、逆にその多様性の中に納まりやすいので、学部の壁を越えて活動した方がいいと思います。さらに、その活動の中で社会ともかわってください。といっても、周りに多様性が多いのは他学部より総科のいい所だと思います。

開 やっぱり異質なものを求めないとね。とにかく、強くなって色々挑戦してみてください。最後に、先生との距離を近づけて、先生をうまく利用してください。

—— 企画を終えての感想 ——

—— 学生時代から「総合科学」を追求し続けている先生方の熱い思いを聞いて、時間を最大限に使って様々な分野を学ぶことの大切さを強く感じた取材でした。

(19生 桑田 雅美)

—— 授業を受けて、本を読んでも、「町田先生に直接会って話してみたい！」という気持ちから取材を申し込みました。そして、取材して改めて、知が徳と共にある希少な方だという想いを強くしました。取材に同行してくれた小野さん、稲村さん、そして何より、貴重な時間を割いて快く取材に応じて下さった町田先生に感謝します。

(19生 寺澤 潤哉)

—— 飛翔の取材を通して、先生方から普段授業では絶対に聞けないような話をたくさん聞かせていただく事ができました。今しかできないことに挑戦して悔いのない様、残りの大学生活を過ごすぞっ！

(18生 中野 陽介)

取材協力	(担当)
18生 中野 陽介	18生 荒川 洸一
18生 桑田 雅美	18生 寺澤 潤哉